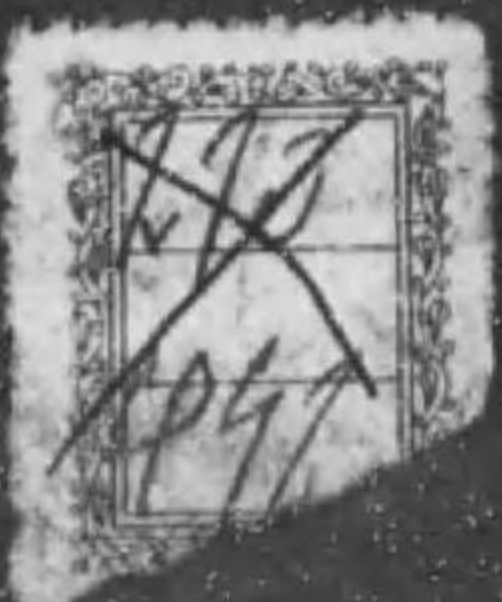


特116

702

春日龍神  
 船橋  
 源氏供養  
 花色  
 富士古鼓

西



始



白宗不家  
觀十世  
心之印

### 春日龍神

概説

内十四卷ノ一

梅尾の明恵上人入唐渡天を思ひ立ち、春日明神へ御暇乞の参詣しけるに、宮

守の老人出會ひ、當明神は上人と笠置の解脱上人とを左右の眼、兩の手の如く

思召し頼み給ふなれば、入唐渡天のこと神慮にかなひ申すまじのみならず明

神は衆生濟度の為め鎮座あらせらるれば、天竺の靈鷲山も春日山に異る

處なからんと説き立て一に因り、上人は日本を去ることを断念し、宮守はさら

は奇特を見せんとて姿を隠せしが、や、ありてさぶくなら下界の龍神出現

して、釋迦の誕生、伽耶の成道、鷲峯の説法、雙林の入滅に至るまで悉く見せ、

龍神は猿澤の池中に入りけり。



大正  
10. 3. 15  
内交

此曲前半ハノドカニ謹ヒ後ハ強ク進ニテ技ケヌ様謹フヘシ  
小書 龍女ノ舞

役別	ワキ 明恵上人	ワキツレ 從者二人	前シテ 宮守ノ翁	後シテ 龍神
装束	角帽子 着附熨斗目 白大口 紺水衣 腰帶 珠数 扇	角帽子 着附熨斗目 白大口 縷水衣 腰帶 珠数 扇	面小半尉(又ハ阿古久尉) 尉髮 翁烏帽子 着附小格子 白大口 縷衤衣 紋附腰帶 尉扇指 萩蓐	面黒鬚 赤頭 龍戴 赤地金段鉾卷 着附厚板 法被 赤地半切 紋附腰帶 打杖
季	三	月	曲柄	(能脇器) 目番五
所	大和國奈良春日神社	二	智古順	級

春日龍神

世阿彌元清作

ワキ僧 用カニ  
ワキツレ二人  
次赤上  
ヨウク  
拍子ニ合

月の行方もそなたごとく。月の行方  
もそなたごとく。日の入る國と暮ねん

ワキ内 用カニ  
これハ梅の尾の明慧法師のわかれ

入唐渡天の志あるより御眼乞の

たあよ春白の明神よまらばやと思ひ

唯今南都より向侍りぬ 道行三人上 用カニ  
園家客山

春日龍神

櫛が原とよそよそと  
よそとて。月よあらびの  
空も長閑ある都の山と  
これも南の勢路や。茶  
三々山。春日の里よ  
里よまきまけり

シテ儗上 柳シロノ  
一セイ  
ツヨク  
拍子ニ合ハズ

晴れたる空よ向へ。和老の光あら

たあり。これ山の動さる形と現れて。  
古今よまきまけり。和老の光あら  
の響とよそよそとて。月よあらびの  
城よは名も久方の天の兜屋根の代々  
こがわ。月よまきまけり。和老の光あら  
神社の誓言もよそよそとて。月よあらびの  
よそとて。月よあらびの

○小謡  
上系 朗カニ

神の誓言も

澄める水屋の清影まで塵は交り  
神心三笠の木林の松風も枝を鳴さぬ  
氣色かお枝を鳴さぬ氣色かお

早月カッテ

あやみこれなる侍奴やすすまき事の

シテ

わかれの梅の尾の明慧上人あては座の

ぞや唯今の出来詣こそ神慮は嬉しく

思ふるゆらん 唯今集詣申

す事餘の儀はあらず。われ入唐渡天  
の志あるはより御暇乞のためは唯今集  
りてゆ 此の休きてゆどもさすかな  
よ人の御事の年始より回事折々の  
は春物の時節の少く遅速とたよ。  
侍らかね珍み神慮をかされよ人  
とづる島と名づけ。笠置の解脱上人

せつてつと頼み双の眼両の手の如く  
 して晝夜各々の権護懇あると  
 こそ承つてふよ日本と云う入唐渡  
 天の給らん事いかに神慮よ叶ふま  
 だ思ひ召しと云う終へワキウケテサラリげにげふ  
 作はさる事あれども入唐渡天の  
 志も佛跡と拜まんだめあれへ行か

神慮よ背くまシテウケテと云う又作も云えぬ  
 ものかに佛在坐の時あらばこそ見聞  
 の益もあるべけれ今の春日の御おこそ  
 昂ち雲鶴山あるべけれその上上人  
 初年の御時を及坂のこの手と合せて  
 禮拜する人向ふすた及がす心あま  
 上系日ウケテ明カニ三笠の森林の草木の  
 三笠の森林の草木の三笠の森林の草

〇小謡  
 拍子合

1911年11月

木の風も吹かぬ枝と垂れ喜白山野  
 邊は狷立つ鹿までも皆悉く出で  
 向ひ膝と折り角と傾けよ人を禮拜  
 するかほどの亭物とてあからも眞の  
 浄土のいつくそと問ふ武蔵野のはて  
 しあつた心や返すかす我が頼む  
 祚のまよもまて止りて祚慮とあがめ

早河

○サシ曲独吟

木々ませ祚慮とあがめ木々ませ  
 猶々當社の御事委しく御物語り  
 巾へ然るよ入唐渡天とらつは  
 佛法流布のなせとめ古蹟と  
 尋ねんためぞか天台山を拜む  
 ぶくは教山よまめるべし五臺山の  
 望あらば吉野飛飯と拜すべし



シテ中<sup>用カメ</sup> 昔の空鷲山<sup>ト</sup>今<sup>ト</sup>は衆生と度せん  
 とて大明神<sup>ト</sup>示現<sup>ト</sup>この山<sup>ト</sup>又<sup>ト</sup>宮居  
 一<sup>ツ</sup>珍<sup>ラ</sup>人<sup>バ</sup> 昂<sup>ラ</sup>ち<sup>シ</sup>鷲<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>山<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>妻<sup>白</sup>  
 のお山<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>拜<sup>ム</sup>む<sup>ベ</sup>し<sup>ト</sup> 仰<sup>ミ</sup>あ<sup>レ</sup>と<sup>ト</sup>知<sup>レ</sup>親<sup>カ</sup>  
 辛<sup>ト</sup>危<sup>ニ</sup>佛<sup>ハ</sup>号<sup>ニ</sup>に<sup>ト</sup>出<sup>テ</sup>て<sup>ト</sup>さ<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>け<sup>ミ</sup>月<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>安<sup>ト</sup>  
 と照<sup>ス</sup>す<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>法<sup>ト</sup>詠<sup>モ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ラ</sup>た<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>  
 然<sup>レ</sup>ば<sup>ト</sup>誓<sup>ミ</sup>あ<sup>ル</sup>意<sup>ト</sup>悲<sup>ト</sup>萬<sup>ト</sup>行<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>非<sup>ト</sup>徳<sup>ノ</sup>

迷<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>照<sup>ス</sup>す<sup>ト</sup>故<sup>ト</sup>あ<sup>レ</sup>や<sup>ト</sup>小<sup>ト</sup>機<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>衆<sup>ト</sup>生<sup>ノ</sup>  
 益<sup>ト</sup>あ<sup>マ</sup>き<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>悲<sup>ミ</sup>み<sup>ト</sup>行<sup>ト</sup>法<sup>ト</sup>瑞<sup>ト</sup>路<sup>ト</sup>細<sup>ト</sup>轉<sup>ト</sup>  
 の<sup>ト</sup>衣<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>脱<sup>キ</sup>の<sup>ト</sup>棄<sup>ト</sup>弊<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>教<sup>ト</sup>衣<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>妻<sup>ト</sup>  
 四<sup>ツ</sup>諦<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>法<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>脱<sup>キ</sup>し<sup>ト</sup>珍<sup>ヒ</sup>し<sup>ト</sup>鹿<sup>ト</sup>野<sup>ト</sup>  
 苑<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>こ<sup>ト</sup>あ<sup>レ</sup>や<sup>ト</sup>妻<sup>ト</sup>白<sup>ト</sup>形<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>起<sup>キ</sup>し<sup>ト</sup>外<sup>ト</sup>  
 す<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>鹿<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>苑<sup>ト</sup>あ<sup>ラ</sup>ず<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>刻<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>外<sup>ト</sup>當<sup>ト</sup>  
 社<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>横<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>山<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>三<sup>ト</sup>笠<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>影<sup>ト</sup>さ<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>

ちる日とあたる現れて誓と四方に  
 喜自那の宮路も末あるや曇  
 けきの西の大寺月澄みて光ぞ増る  
 七丈寺の法の花も八重桜の都を  
 春日那の妻こそそのどけかりけれ  
 げに有難き御事かお即ちこれと  
 非託と思ひ定めてこの度の入

唐とび思ひとまらるべし。きりてきて  
 御身の如くなる人ぞ御名をと名  
 告り給ふべし 入唐渡天を  
 まり給うる三笠の山又五天笠を寫  
 し。摩那の誕生伽那の成道執馬  
 峯の説法 雙林の入滅まで悉く  
 見せ奉るべし 暫くは侍ら給へ

本綿シテ四手シテの非トの告トわれの時ト風ト去ト  
 行トぞとてかき消トすやうト又ト失トせよト  
 けりトかき消トすやうトにト失トせたりト中入間  
早上等三人 朗カニ因カニ 待謠 祇ト託ト正トはトあトらトたトあトるト祇ト託ト正トはトあトらト  
○切迄難子 たトあトるト聲トのト内トよりト光トきトまトるト野ト  
 山ト金ト色トのト世ト界トとトあトりトてトまトもト亦トもト  
 佛ト體トとトあトるトぞト不ト思ト議トなトるト佛ト體トと

中 用九心  
 ありぞ不思議なる

上地 早笛 天上刻  
 時子天地震動する下界の龍神

の集會シテかシテすシテのシテ大シテ龍シテ王シテ

龍王シテ改シテ雜シテ陀シテ龍シテ王シテ

和修シテ吉シテ龍シテ王シテ 德シテ又シテ迦シテ龍シテ王シテ 阿シテ那シテ

婆シテ達シテ多シテ龍シテ王シテ 百シテ千シテ眷シテ属シテ引シテきシテ連シテ

れシテ引シテきシテつシテれシテ平シテ地シテはシテ波シテ瀾シテをシテ立シテてシテ

佛ニハクの會エ度ト又シテ出ツル衆ラ一ツてハ街ハク法ハクとハク聽キク

聞クするハクシテ下カ確カリト重ククトナル様シその外ハク妙ハク法ハク堅ハク那ハク羅ハク王ハク

又ハク持ハク法ハク堅ハク那ハク羅ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

樂ハク音ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク樂ハク乾ハク達ハク婆ハク女ハク王ハク

日ハク好ハクのハク月ハクのハク三ハク竺ハクのハク雲ハクよハク上ハクりハク飛ハク

天照大神

ヒ

○獨吟佳舞

八ハク大ハク龍ハク王ハクのハク八ハクつハクのハク冠ハクとハク傾ハクけハク前ハクのハク表ハク

仲ハク行ハクくハクばハクかハクりハク月ハクのハク清ハク舟ハクのハク佐ハク保ハクのハク

つハクらハクよハク浮ハクみハク出ハクづハクれハクハハク八ハク大ハク龍ハク王ハクのハク働ハク

立ハクつハクのハク緑ハクのハク空ハク色ハクもハク映ハクるハク海ハク息ハクのハク

妙ハクるハクれハクやハクわハクだハクのハク糸ハクのハク拂ハクみハクはハク白ハク玉ハク

神ハク龍ハク女ハクがハク立ハクちハク舞ハクみハク波ハク瀾ハクのハク神ハク白ハク

立ハクちハク舞ハクみハク波ハク瀾ハクのハク神ハク白ハク

働

火の野守も出でてんよや摩耶の  
 誕生鷲峯の純法雙林の入滅  
 悉く終りてこれまでありや月慧  
 上人きて入唐は  
 渡天のめりよ  
 佛跡の尋ねまじや  
 尋ねてもこの上あらうの雲よ

棄りて龍女の南無に飛び去り  
 行けば龍神の猿澤の他の青波  
 蹴立て蹴たてその丈お尋の  
 大蛇とあつて天よむらかり地よ蟻  
 りて池水をかりて失せまけり

春日音

一

萬葉集の歌に「上野や佐野の船橋とりはな一親一さくれと我はさかればへ」といへるが有り。之に就き後世の俗説に、昔此佐野の里に住みける男、忍び妻にあこがれ、川を隔て、夜なく通ひけるに、二親此の事を深く厭ひ、橋の板を取放し置き、を夢にも知らず打渡りかば踏みはず、水に溺れて空になりけりといふ。此男女の靈旅僧に現れ、其當時の様など語り、法味を得て妄執を晴らし、成佛の身となりけり。

船橋 概説

内十四卷ノ二

此曲ハ浮キ立ツヲ好マサルニレドモ重キニ非ズ幾分凄味ヲ含マテサリト謡フヲ宜シトス

後シテ	前シテ	ツレ	ワキツレ	ワキ	役
里男ノ靈	里男ノ靈	里女ノ靈	山伏二人	山伏	別
面淡男(千種男ノ類) 黒地金段鉾巻 黒頭 着附段厚板 白大口(又ハ紺淺黄花色類ノ大口又ハ半切ニモ) 縫紋腰帶 扇 打杖持	着附段厚板斗目(又無地ニモ) 白大口 掛素袍(水衣ニモ) 縫紋腰帶 男扇	面連面 髪 髪帶 着附筒 唐織着派シ	兜巾 簪懸 着附厚板 水衣 白大口 腰帶 小刀 男扇 兜巾 簪懸 着附厚板 水衣 白大口 腰帶 小刀 男扇 荊高珠数持	兜巾 簪懸 着附厚板 水衣 白大口 腰帶 小刀 男扇	装 束 附
(目番ニ畧) 目番四	曲柄	月	三	季	
級 三	管吉順	村野佐郡馬群國野上		所	

松橋

世阿彌元清

ワキ山伏  
ツレ  
拍子三合

山又山の行く末や山又山の行く  
末や雲路の去るべあるらん  
三徳野より出てたる客僧もて  
われ末だ松嶋平泉と云すの程よ  
この妻思ひ立ち松嶋平泉へ急  
ぎの

可

瀬渡りの野洲の川かの織女の  
 契待つ年は一夜のあだ夢の醒  
 舟の宿と過ぎ伊次舟の音又  
 の又月の霞むや美濃尾張老と  
 知れとの心かお老と知れとの心かお  
 急ぎの向られのちや上野の國佐野と  
 申す可は急ぎまての心かお宿

中田九心

と借らばやとぬ一休  
 法よよる道ぞと造る船橋の後の世  
 かくる頼かたな 借事 ぬれりて  
 何事もとん残す夢のうき橋はあは  
 数係へて舟競み堀江の川の水深に  
 寄るべ定めぬあだ彼の浮世は帰る  
 六の道通れかねたる心かお

シテ男二人上用カニ  
 ツレ女一ツ  
 拍子合ハス

中田九心



下系中シテカツテ

哀しきものごと古の蹟をるばると

○小謡

思ひやるウ前上系の世サラシメの報ヨトルのまハクヒまヒよテスシ

生ウマれニまニてウツシ報キのニまニにウマ生ウマれニまニてウツシ心ニよカ

けニばニそニもニ身ニのニ生ウマ死ウマのニ悔ニとニ渡ニるニまニ

船フネ橋ハシとト造ツクらバばニやニ二ニ行ニのニ流ニれニのニあニりニ

あニかニらニ科カはニ十ニのニ道ミチ多クりニ真マコトのニ橋ハシとト

渡ワタさニぞニやニ志シのニ橋ハシとト渡ワタさニぞニやニ。

シテカツテ

妙マコトアニはニ客キヤク僧ソウ橋ハシのニ勸スメみニ入イりテ御オン

雨アメりハへニ見ミやニせセぶニ俗ゾク體タイのニ身ミとト

てニ橋ハシ興キョウ立リツのニ志シ返ヘすニ返ヘすニもモやヤ

しウうニこニそニゆニへニシニテカツテこれノ依ヨりトもモ覺オえニぬニ

ものノかニなニ必カナラずニ出シ家ケもモあラぬニぞトそト

志シのニあラまニまニづニまニみニてモゆニかニずニまニづニ

勸スメみニ入イりテ御オン通トホりテ依ヨりテ入イりテ勸スメみニ

まのふへ。さてこの橋はらつのは  
字より渡されたる橋ありていそ

萬葉集の歌よ東路の佐聖の

舟橋取り教しと詠める歌の心

とべおろしめいはずやツレ上サラリいぢま

又やせふ船かや身の古もイニシハ津河お

こられ沈みしこの川のシテ二分上カツテさの又は

ささよまきたる昔多まの三瀬川

よハル厚む便の船橋と後してたがせ

終へシテとまげみげ又親とされば

の物カル上借さそはありに船橋の主を

助けんそのためかシテ殊更これの山伏

の橋とべ渡り終みべシテそも山伏

の身あればとて取り分ま橋と

シテ

シテ

後すべきかシテ用カニ 其の女お争ひ給ひそ  
 きよ。役エシの優婆塞ウツク昔城カヅラや新イりし  
 久米路メの橋ダの如クや又ヨウクたよまシるべキま  
 身ミはあラらねも。われも女メのあつらま  
 のレ非カ。一ヒト言コト葉ハあてかむまじやたる  
 幾イ度タビも岩イハ橋ハシのシレあど市チはなかけ  
 給タはぬ。さりあからよそあて聞く

○小謡

も昔コト城ドニや夜ヨル作ツクるある岩橋ハシなららば  
 渡ワらん事も雑かるべト。これノ長チまま  
 春ハルの日の長閑ハけま水ミヅの船橋フネよままま  
 して柱もしるまどや。後チよ朽ちら  
 果イてんを造り給へ山伏ヤマ。前マエの因じ  
 名ナの前は同ド名の佐野サノの渡りの  
 夕ユフ言コトは神うちり拂ひてお通りある

カミ條氣カミのころアも妻ハありス川カハのサ花ハ  
次スきラ後ハせス船橋フナバシのア法ホウはス住スきキ集キのチ道ミチ  
造ツクりガ鈴スズへシ山ヤマ伏フス峰ミネとシ四シりシ鈴スズもモ渡ワタ  
とト通トらスてシいイづクへシ行イかせセ鈴スズふベまシ。  
早ハヤ河カハササリ

カミカミてテきキそソ萬マン葉エフ集シツのノ歌ウタはハ東アヅマ路ヂのノ佐サ  
野ノのノ船橋フナバシ取トリりリ教ナへテ又マタ鳥トリのノ無ムと  
二ニ流リウはハ詠ヨウまマれレたタるルのノ行イとト申マウしたシるル

謂イハレふフてテいイふフぞゾ シテ確カクカリ シテ佐サそれレはハつツらラて  
物モノ語ゴのノいイ落ラクつツてテ聞キかせセ中ナカしシいイふフべベし。  
昔ムカシこのノ處トコロはハ住スみミけケるル者モノ恐オソびビ妻ツメは  
あアこコかカれレ前マヘはハ川カハとト隔ヘてテたタれレばバこの  
船橋フナバシとト通トとトしてシ夜ヨあア夜ヨはハ通トひヒ  
けケるルよヨ二フタ親オヤこのノ事コトとト深フカくク厭イひヒ橋  
のノ板イタとト取トリりリ教ナすスそれレとトづツ夢ユメみミもモ

10. 116

ハ

知らずしてかけて頼みし橋の上  
 よりかつばさ落ちて空しくあるま  
 執と云ひ因果といひそのま三途よ  
 沈みもてゝ紅蓮大紅蓮の氷も因ら  
 られて同中ウケテ用カニ浮む世もあき苦の海こそ  
 あらぬ門橋や磐石も押され苦を  
 受くるカ切うクセ下用カニらば沈みも果てずして

魂の身と責むる心の鬼とあり夢り  
 あは哀草の事まげく甲邪淫の思に  
 こかれ行く船橋も古き物語真の  
 身の上あり種か跡とひてたび絵入  
 外シテ上日漸く傾きて霞の空もかま  
 くらりウ雲とあり雨となる中宵の  
 道も近づくか橋と見えも中絶え

ぬこころのまきく東路の佐野の船橋  
身はあし鐘こそ響音け夕暮の  
空も別なるなり又けり空も別ふ

あり又けり 中入間

早三人上あさり  
待望  
〇切定難子  
ツク

古りあし跡をあらためて古りあし  
跡をあらためて三寶が持の行ふ  
五道の罪も消えぬべき法のがぞ

ツシ女カニ上  
出端  
拍子合ハズ

有難き法のカぞ有難き

いかに行者者難や徒に三途に沈  
みし身あれども法のカが船橋の  
浮む身とある有難きよ  
行者われは猶この妄執の故よ  
より浮みかねたる橋柱の重き苦  
患をえんせやさし  
後雨と降ら

あし渡川水増りあは歸り来  
るかよ 返れや返れあだ彼の  
柱と戴く磐石の苦患 出たれ  
ん強へ清まらや 慰我身者發  
菩提の功かをと受けてらふならく  
奈落の底の水層とありしとを我  
心者即身成佛有難や 痛や

未だ邪淫の業深まその執心と  
振り捨てて猶々昔と懺悔し終へ  
何事も懺悔は罪の雲消えて  
真如の月も出でつべし 五障の  
霞の暗れがたき春の夜の一時  
胡蝶の夢の戯りていて姿と見  
え中さん 或は 吉野のおあらねど

これも妹背の中川の橋のどた

えのありけるとはは白波のよる

ごまに ツレ上サマリ 通ひ別れたる浮舟の

共よこがる思妻 中シツカリ 宵々よ通ひ

別れたる船橋の牙え渡る夜の月も

半よ更け静りて 上地 人もねよ

臥し丑三つ寒き 中 風も厭はし

○仕舞

申

申

邊瀬の向の岸よ見えたる人影

心焼しや頼もし カサ

互よそれぞとんみえ カサ 中の互よ

それぞとんみえ カサ 中の橋と隙

て立ち来る彼のより羽の橋か

鶴の行きあひの回近くありゆく

まに放せる板回と踏みまづ カサ かつば

上糸

俗

十



と落ちて沈みけり用て手強ク東路の佐野  
の船橋取り敷しキリ中親しくさくれば妹  
に逢はぬかも抑ま合執心の鬼とあつて  
執心の鬼とあつてヤ若くは三途の川橋  
の橋柱も立てられてヤ悪施の氣色  
も憂り程あくヤ生気安婆の妾  
執上邪上姪上の悪鬼とあつてヤわれと

身と責め苦患も沈むと行者の  
法味功加よりヤ真如法身の玉  
橋の真如法身の玉橋の浮める  
身とぞあり又けるヤ浮める身とぞ  
あり又ける。

源氏物語の巻末に、法印の御供養の事記しあり。法印は、源氏の御供養をせざりし科、我れ石山寺に籠りて源氏物語六十帖を書きしも、源氏に供養をせざりし科、にて苦患を受け居れば、願はくは源氏の供養をなす。又我が跡をも弔ひて給はれと言ひ、其の身の紫式部なることを暗示して見えすなりぬ。仍て法印供養をなせるところに式部の霊現れ、報謝にとて紫の薄衣にほやかに一曲を舞ひけるが、式部は観世音化現して源氏物語に世の夢なることを人に知らせんとの方便ならんと、法印愈佛徳を仰ぎけり。

源氏供養

概説

内十四卷ノ三

安居院法印、石山寺の観世音を信するけり。或時参詣の途中一人の女性出て來り、我れ石山寺に籠りて源氏物語六十帖を書きしも、源氏に供養をせざりし科、にて苦患を受け居れば、願はくは源氏の供養をなす。又我が跡をも弔ひて給はれと言ひ、其の身の紫式部なることを暗示して見えすなりぬ。仍て法印供養をなせるところに式部の霊現れ、報謝にとて紫の薄衣にほやかに一曲を舞ひけるが、式部は観世音化現して源氏物語に世の夢なることを人に知らせんとの方便ならんと、法印愈佛徳を仰ぎけり。

此曲開カニ品好ク謡フベシ但シ重クナルヲ好マズ  
小書 脇留 舞入

後シテ	前シテ	ワキツレ	ワキ	役別	装束	季
紫式部	里女	從僧二人	僧安居院法印			
葛扇 前折烏帽子着ラモ 経懐中	面若女 髪 髪帯 着附摺箔 唐織着流(紅白絞ノ類) 葛扇	角帽子 着附無地履斗目 綾水衣 白大口 腰帶 珠敷 扇	角帽子 着附小格子 水衣 白大口 腰帶 珠敷 扇 (又ハ着流シ僧ニモ)			
(物葛) 目番三	曲柄	月	三	季		
級 一	管古順	寺山石邸賀滋國江近	所			

ワキ僧  
次上  
拍子ニ合

源氏供養

禪竹氏信作

夜も同ト 吾の道 夜も同ト 吾の  
道石山寺よまらん 此れは安居  
院の法印きていわれ石山の觀世  
音を信ト 常よ歩くと運びひの今日  
もまたまらばやと思ひひの時も  
名も花の都とまらち出てて花の

都を立ち出でて。霞まつ夕波の  
 白門おもて過ぎ行け。音羽の籠  
 をよそよ見えて。閑つてあたる朝霞  
 されども。残るが。月影もああなた  
 鳥の海け。面白き。氣色かあげ  
 面白き。氣色かな。松塩焼かなど  
 老賀幸崎の。一つ。呼哉。あうな

も。備の。彼。たつて。そ。水。の。煙。あ。れ  
 た。つ。て。そ。水。の。煙。あ。れ。あ。う。な  
 う。安。居。院。の。法。印。に。中。す。べ。き。事。の  
 法。印。と。い。つ。て。な。た。の。事。あ。て  
 の。か。行。事。あ。て。い。ぞ。わ。れ。石。お。よ  
 籠。り。源。氏。六。十。帖。と。書。き。し。る。し  
 亡。ま。の。跡。ま。で。の。筆。の。す。ま。み。の。名。の

形見とのなりたれども<sup>中用カニナニ</sup>かの源氏は  
 終子<sup>ツギ</sup>供養とせざりし<sup>科</sup>科より  
 源事<sup>ニ</sup>あ<sup>ナ</sup>く<sup>ナ</sup>さ<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>入<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>ぬ<sup>ナ</sup>べ<sup>ナ</sup>く<sup>ナ</sup>  
 石<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>あ<sup>ナ</sup>て<sup>ナ</sup>源<sup>ニ</sup>氏<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>供<sup>ニ</sup>養<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>が  
 跡<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>ひ<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup>び<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>へ<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>こ<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>申<sup>ニ</sup>  
 さ<sup>ニ</sup>ん<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>これ<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>で<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>  
 早<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>ウ<sup>ニ</sup>ケ<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>これ<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>ひ<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup>

ものかなさうあから易<sup>ヤス</sup>き<sup>ニ</sup>向<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>  
 供養とつづ<sup>ツ</sup>く<sup>ニ</sup>べ<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>誰<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>志<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>  
 回<sup>エ</sup>向<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>シ<sup>テ</sup>困<sup>カニ</sup>カ<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>困<sup>カニ</sup>カ<sup>ニ</sup>  
 源氏の供養とつづ<sup>ツ</sup>く<sup>ニ</sup>べ<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>誰<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>志<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>  
 も現<sup>ア</sup>れ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>源<sup>ニ</sup>氏<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>吊<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>べ<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>  
<sup>ワキ</sup>嬉<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>それ<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>持<sup>キ</sup>た<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>源<sup>ニ</sup>氏<sup>ニ</sup>  
 を<sup>ニ</sup>書<sup>キ</sup>ま<sup>シ</sup>る<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>恥<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>この<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>源<sup>ニ</sup>

世のまゝなれども ワキウケテ 名とは埋まぬ

苔の下 シテ中用カニ 石山寺に立つ雲の

ワキウケテ 紫式部 シテ用カニ 申す 拍子三合 死シテ用カニ

やきに出づる シテ用カニ 紫の シテ用カニ 色に出づる シテ用カニ 紫

の雲も シテ用カニ そなた シテ用カニ から シテ用カニ 夕日影 シテ用カニ きて シテ用カニ それ

も シテ用カニ 名 シテ用カニ 告 シテ用カニ り シテ用カニ え シテ用カニ ず シテ用カニ か シテ用カニ き シテ用カニ 借 シテ用カニ す シテ用カニ 中 シテ用カニ へ シテ用カニ 失

せ シテ用カニ 又 シテ用カニ け シテ用カニ り シテ用カニ か シテ用カニ き シテ用カニ 借 シテ用カニ す シテ用カニ 中 シテ用カニ へ シテ用カニ 失 シテ用カニ せ シテ用カニ 又 シテ用カニ け シテ用カニ り シテ用カニ 中 シテ用カニ へ

ワキカハル上 用カニ ワキウケテ

おそ シテ用カニ 石山 シテ用カニ ま シテ用カニ め シテ用カニ り シテ用カニ つ シテ用カニ る シテ用カニ 念 シテ用カニ 珠 シテ用カニ を シテ用カニ 勤 シテ用カニ

こと シテ用カニ 終 シテ用カニ り シテ用カニ 夜 シテ用カニ も シテ用カニ 更 シテ用カニ け シテ用カニ 方 シテ用カニ の シテ用カニ 鐘 シテ用カニ の シテ用カニ 聲 シテ用カニ

心 シテ用カニ も シテ用カニ 澄 シテ用カニ め シテ用カニ る シテ用カニ せ シテ用カニ り シテ用カニ 中 シテ用カニ へ シテ用カニ あり シテ用カニ つ シテ用カニ る シテ用カニ 深 シテ用カニ 氏

の シテ用カニ 物 シテ用カニ 借 シテ用カニ 真 シテ用カニ から シテ用カニ ぬ シテ用カニ 事 シテ用カニ な シテ用カニ れ シテ用カニ ども シテ用カニ

借 シテ用カニ 養 シテ用カニ と シテ用カニ の シテ用カニ づ シテ用カニ て シテ用カニ 紫 シテ用カニ 式 シテ用カニ 部 シテ用カニ の シテ用カニ 善 シテ用カニ 提 シテ用カニ と

深 シテ用カニ く シテ用カニ 用 シテ用カニ め シテ用カニ 借 シテ用カニ 真 シテ用カニ な シテ用カニ り シテ用カニ 上 シテ用カニ 三 シテ用カニ 人 シテ用カニ 用 シテ用カニ カニ シテ用カニ 思 シテ用カニ 入 シテ用カニ ども シテ用カニ

あ シテ用カニ だ シテ用カニ 世 シテ用カニ の シテ用カニ 思 シテ用カニ 入 シテ用カニ ども シテ用カニ あ シテ用カニ だ シテ用カニ 世 シテ用カニ の シテ用カニ 思 シテ用カニ 入 シテ用カニ ども シテ用カニ あ シテ用カニ だ シテ用カニ

拍子三合

ワキ 重シモリ

ワキ 重シモリ

待詠

用カニ

世の夢にうつろひ夢のきある花も  
 一時のきあだほも消えし古の光深氏  
 の物諸聞くらつててもその誠頼  
 少き心かお頼少き心かな

後シテ再上 用カニ重シキリ  
 一セイ  
 拍子合ハズ

松月も教れば形見とあるものごと  
 思ひし山の下紅葉 地ウ落ス  
 に出でし見えん 吹雪の如かりや

早カル上 用カニ確カリ

かくて夜も深更にあり鳥の聲とま  
 まり心凄まじりふし燈火のかげと

見ればさも美しき女村家の薄夜の

そぞと取り歌の如くにんえ鈴み

夢か現かおぼつかも 移ろひ

やすき花色の籠衣の夜の下でかれ

雲の色こそ見えぬ枯葉の秋もとの

早カル上

五

あらまゝ一業通ら<sup>ハ</sup>名告ら<sup>ズ</sup>ず<sup>シ</sup>  
 うめされず<sup>ヤ</sup>業の色に<sup>ハ</sup>出で<sup>ズ</sup>ず<sup>シ</sup>  
 あらまゝの<sup>ハ</sup>業の<sup>ハ</sup>末に<sup>ハ</sup>心得ぬ<sup>業</sup>  
 式教<sup>ア</sup>て<sup>マ</sup>ます<sup>カ</sup>が<sup>ハ</sup>恥<sup>カ</sup>り<sup>ナ</sup>から<sup>ズ</sup>  
 我<sup>ガ</sup>姿<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>面影<sup>ハ</sup>昨<sup>ハ</sup>白<sup>ハ</sup>見<sup>ル</sup>  
 姿<sup>ハ</sup>今<sup>も</sup>妻<sup>ら</sup>ね<sup>ば</sup>互<sup>ハ</sup>心<sup>と</sup>  
 お<sup>ま</sup>も<sup>せ</sup>ず<sup>シ</sup>寝<sup>も</sup>せ<sup>ず</sup>明<sup>か</sup>す<sup>と</sup>  
 〇小<sup>説</sup>

夜半の<sup>ハ</sup>月<sup>も</sup>心<sup>せ</sup>よ<sup>石</sup>山<sup>寺</sup>の<sup>ハ</sup>鐘<sup>の</sup>聲<sup>ハ</sup>  
 夢<sup>も</sup>も<sup>誑</sup>み<sup>凡</sup>の<sup>ハ</sup>前<sup>消</sup>え<sup>ハ</sup>それ<sup>カ</sup>  
 燈<sup>火</sup>の<sup>ハ</sup>光<sup>源</sup>印<sup>の</sup>蹟<sup>と</sup>ほ<sup>ん</sup>光<sup>源</sup>  
 印<sup>の</sup>蹟<sup>と</sup>ほ<sup>ん</sup>あ<sup>ら</sup>ら<sup>有</sup>難<sup>の</sup>御<sup>事</sup>  
 事<sup>や</sup>行<sup>と</sup>か<sup>布</sup>施<sup>又</sup>ま<sup>ら</sup>せ<sup>ゆ</sup>べ<sup>ま</sup>  
 い<sup>ち</sup>布<sup>施</sup>と<sup>も</sup>思<sup>ひ</sup>も<sup>よ</sup>ら<sup>ず</sup>ゆ<sup>と</sup>  
 も<sup>こ</sup>の<sup>ハ</sup>世<sup>の</sup>夢<sup>の</sup>う<sup>ち</sup>昔<sup>に</sup>返<sup>す</sup>辞<sup>ハ</sup>



の袖カル上のみう舞うてゑせ給へシテ同用 恥シテかり

なからさうりさそへ侍オフレとばはむかてシテ背シテく

べきらでらでささらば舞マはんとて

固ワカよりその名もシテ同用 雲のシテ色シテ珍シテし

手マ薄マ夜のマ目ワキも紅シテの扇マと持マち

恥シテかりシテながらシテ弱マ々とシテあはれシテ胡蝶マの

ひとシテと遊マ 夢シテのシテうちシテなるシテ舞マのシテ袖マ

夢マのマうちマなるマ舞マのマ袖マ現マるマ返マすマまマ

もマがマなマ 衣マのマ色マ籠マ装マ自マらマ

袂マかなマいマ日マ 衣マをマ常マとマいマつマ目マのマ前マ

なマれマもマ形マもマなマ 一マ生マ夢マのマ如マしマ

維マあマつマてマ百マ年マとマ送マるマ 權マ花マ一マ日マなマ

同マくマにマ教マなマらマぬマ 装マ式マ部マ頼マ

をマかマけマてマ石マ山マ寺マ悲マ幹マとマ頼マみマ籠マりマ

○サ、曲、独、吟  
○切、迄、離、子

居てこのお徳と筆に任す 中 斗れ  
 とも終に供養とせざりし 中 科より  
 妄執の雲も晴れかたり 中 今逢ひ  
 難き縁に向つて 中 中の諸教を發し  
 一つの巻物に写し 中 筆の眠と覚す  
 南無や光海舟の 中 幽霊吹等正學  
 名 中 下 中 雨 中 カミ  
 拍子 中 合 中 ヤラ  
 桐壺の夕の煙速 中 よ 中 法 中

○は舞

性シの空クよまマり。筆フデ木の夜ヨの言コトの茶チヤ  
 の終ハシよ光ミツ樹ツの花ハナ教ケウりぬ。空ク蟬セミの  
 空クよまマこの世ヨと厭ウツひて。夕ユフ顔ガハの  
 家イヘの命イノチと観カン。若ニホ紫ムラサキの雲クモの迎ムカヒ  
 末スエ摘ツク花ハナの臺ダイに座ザせん。紅ベニ城シロの賀ガの  
 秋アキの落オチ葉ハもよヨしや。たタまたま  
 佛ブツ意イに逢アひなナからカラ排ハ城シロのきキして

往生と教めべし 梵教の里に住む  
とても愛ふ離苦の理免れ難ま  
道とかわたすべからく生死流  
浪の須磨の浦と出ては智圓明の  
明石の浦に漂標いつまでもあり  
なんたの蓬生の宿あから菩提の  
道と教めべし 松風の吹くとも

業障の薄雲の晴る事更にあ  
秋の風消えずして紫磨忠厚の  
藤袴上品蓮臺に心と懸けて誠  
ある七寶花嚴の真木柱のもよ  
行かん梅の枝の白に移る我が心藤の  
裏葉に墨くおのその玉草かけ  
しを朝顔の光転まれずあ

五ノ下ノカキ

シ

梅檀の陰に寧坐木く名も高き  
宮位と東屋の内には籠めて樂み  
榮と浮舟に壁をみべとかわされ  
も蜻蛉の身なるべし夢の浮橋  
とうち渡り身の来迎と致みべし  
南無や西方弥陀如来狂言浄語と  
ふり捨てて装式部が後の世と

助け終人とともろとも鐘うち後  
して回向も既に終りぬ  
面白や舞ひ人の名残今やなく  
身シテ上の夢とも返す旅かな  
光保氏の御蹟と申み法のかに  
てわれも生れん蓮の花の宴は  
頼もしや地上げにや朝は秋の光

シテカッテ  
夕には影もなし朝顔の露  
電の影いづれかあたならぬ定  
女の浮世や キリ中 月くよく物と案  
ずるはよく物と案ずるお  
崇式教とやすはかの石山の観世  
音假にての世は現れてがる海氏  
の物語これをも思へば夢の世と人に

知らせん 海方便には方難ま折  
かた思へば夢の浮橋も夢の間  
の言葉なり夢の間を築あり。

118

118

花 篁 概説 内十四卷ノ四

花 篁

概説

内十四卷ノ四

繼體天皇未だ御位に即かせ給はずして大跡部の皇子と称し、越前國味真野といへる所におほしける頃、照日の前とて御寵愛深く召使はれたる女あり。天皇御即位ありて御暇を賜りたる時、朝夕御手に馴れし花篁と御文とを下されけり。照日の前は御別れを悲みて狂氣し、都に上る途にて紅葉の行幸に會ひ、天皇の御目に留りて御車近く召されけるが、不圖携へ持てる花篁を窺覽あらせられ、深くあはれに思召されて昔の如く召し使はんとの宣旨を傳へられしかば、狂女はいたく喜びて御供に隨ひ都に参りけりとぞ。

此曲終シテ晴ヤカニ確カリト謡フベシ但シ荒ク謡フハ悪シ  
 小書 大返シ 笹ノ傳 女御留

役別	装束	附	季
ワキツレ 御使ノ男	着附厚板目 素袍上下 小刀 文ト花籠ヲ持ツ		九
前シテ 照日ノ前	面若女 髪 髪帯 着附摺箔 唐織着流シ		月
子方 繼體天皇 <small>(註トシ)</small>	初冠(纓) 着附縫箔 單狩衣 指貫 腰帶(紋付) 扇持		曲柄
ワキ 供奉官人	着附厚板 法被 白大口 紋付腰帶 扇		四番目 (目番三畧)
ワキツレ 輿舁二人	着附厚板 白大口 紋付腰帶 扇指ス		級 一
ツレ 侍女	面連面 髪 髪帯 着附摺箔 唐織着流 花籠持		
後シテ 照日ノ前	面若女 髪 髪帯 着附摺箔 唐織(右肩脱ケ) 笹(文付) 扇		
		前越前大内 今國和 立國和 郡立國和 味郡立國和 真郡立國和 村野真郡立國和 池村倍安郡立國和	所

花籠

観阿彌清次作

早ツレ男ササリ 引ヒキ 付ツキ 越ヒ 前マヘ の 國クニ 味ミ 真マ 野ノ と 申マウ 入イ 候ケル 所トコロ 男ヲ 大オ 途ト の 皇ミコ 子ノ に 仕ツク 入イ 申マウ 入イ 候ケル 所トコロ 都ミヤコ より 御ミコト 使ツカヒ あつて 武ブ 烈レツ 天テン 皇ミコ の 侍シ 代ト 々々 味ミ 真マ 野ノ の 皇ミコ 子ノ に 御ミコト 讓ユツリ あり 御ミコト 返マカヒ の 人ヒト が まかり 下クダ り 御ミコト 供トモ 申マウ 入イ 候ケル 所トコロ 今イマ 朝アサ 疾ハヤ く

水<sup>ゴ</sup>上<sup>シヤク</sup>洛<sup>ラク</sup>はてい<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>向<sup>カ</sup>この程<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>籠<sup>カ</sup>  
愛<sup>アイ</sup>あつて<sup>カ</sup>召<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>られて<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>照<sup>カ</sup>白<sup>カ</sup>の前<sup>カ</sup>  
と<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>方<sup>カ</sup>この程<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>殿<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>  
里<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>度<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>方<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>俄<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>水<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>  
洛<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>玉<sup>カ</sup>章<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>朝<sup>カ</sup>毎<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>手<sup>カ</sup>  
に<sup>カ</sup>列<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>花<sup>カ</sup>篋<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>集<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>  
某<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>持<sup>カ</sup>ち<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>集<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>との<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>にて<sup>カ</sup>い

程<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>唯<sup>カ</sup>今<sup>カ</sup>照<sup>カ</sup>白<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>室<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>急<sup>カ</sup>ぎ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>  
あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>嬉<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>これ<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>これ<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
か<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>べ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>行<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>にて<sup>カ</sup>  
い<sup>カ</sup>ぞ<sup>カ</sup>我<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>君<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>都<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>途<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>  
御<sup>カ</sup>位<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>即<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>給<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>今<sup>カ</sup>朝<sup>カ</sup>疾<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>  
り<sup>カ</sup>にて<sup>カ</sup>作<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>これ<sup>カ</sup>なる<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>文<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>花<sup>カ</sup>  
篋<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>確<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>集<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>との<sup>カ</sup>御<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>

ガタミ



にてのぞかれは<sup>ゴ</sup>辱<sup>シ</sup>れ入<sup>ル</sup> <sup>シテ</sup>用<sup>カニ</sup> <sup>カ</sup>ての我が  
 君御位<sup>クワンキ</sup>に即<sup>ツカ</sup>せ給<sup>ヒ</sup>都<sup>ノ</sup>の御<sup>オン</sup>より  
 返<sup>カ</sup>す返<sup>ガ</sup>すも御<sup>オン</sup>めて存<sup>ウ</sup>てそゆへ  
 とよきりあから<sup>ホ</sup>年月<sup>トシツキ</sup>の御<sup>オン</sup>名<sup>ナ</sup>残<sup>リ</sup>  
 つの世<sup>ヨ</sup>にか<sup>ハ</sup>志<sup>ツ</sup>るべ<sup>キ</sup>あ<sup>ラ</sup>御<sup>オン</sup>名<sup>ナ</sup>残<sup>リ</sup>  
 惜<sup>ハ</sup>じや<sup>ハ</sup>され<sup>ド</sup>も思<sup>フ</sup>め<sup>シ</sup>忘<sup>レ</sup>れ<sup>ズ</sup>  
 して御<sup>オン</sup>玉<sup>タマ</sup>章<sup>ツサ</sup>と残<sup>リ</sup>置<sup>カ</sup>せ給<sup>ヒ</sup>

事<sup>コト</sup>のあり<sup>カ</sup>たさ<sup>キ</sup>急<sup>キ</sup>ま<sup>シ</sup>るま<sup>ラ</sup>せ  
 ぬ<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>れ<sup>ル</sup>應<sup>オ</sup>神<sup>カミ</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>ウ</sup>の尊<sup>ツク</sup>苗<sup>タケ</sup>と  
 継<sup>ツ</sup>ぎ<sup>ノ</sup>あ<sup>ラ</sup>ら<sup>ハ</sup>帝<sup>テイ</sup>位<sup>イ</sup>と履<sup>フ</sup>む身<sup>ミ</sup>にあ<sup>ラ</sup>ら  
 ざ<sup>レ</sup>ど<sup>モ</sup>天<sup>アマ</sup>照<sup>テル</sup>太<sup>オ</sup>神<sup>カミ</sup>の祚<sup>ソク</sup>あ<sup>レ</sup>ば  
 毎<sup>マ</sup>日<sup>ニ</sup>に伊<sup>イ</sup>勢<sup>セ</sup>と拜<sup>イ</sup>し奉<sup>ム</sup>りし<sup>コト</sup>そ<sup>ノ</sup>  
 祚<sup>ソク</sup>感<sup>カン</sup>の<sup>カ</sup>ま<sup>リ</sup>にや群<sup>ム</sup>臣<sup>シ</sup>の選<sup>セン</sup>又<sup>マ</sup>出<sup>ダ</sup>  
 され<sup>テ</sup>い<sup>ハ</sup>ばあ<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>く雲<sup>クモ</sup>の上<sup>ノ</sup>廻<sup>マ</sup>り

あまべまき月影と秋の頼に残す  
 あり頼めたる袖かれ別れ月影の  
 志ぐり雲居にへだてありとも  
 書き置き鈴み水莖の跡に残るぞ  
 悲しき君と信む程たまありし  
 山里に獨り  
 残りて方明のつれあふ春もすぎ

下地 用カニ  
 カヘテ  
 拍子ニ合

ま吹く松の嵐もいつか花の跡  
 とてあつかひき御花篋玉章と  
 抱きて里に帰りけり抱きて里に  
 帰りけり君の恵も高照す  
 君の恵も高照す紅葉の御幸早  
 めん 春くもこの君の應神天皇  
 五女の御来男大迹の皇子と申し

早侯奉立象 朝カニ確カリ  
 次オ上ツヨク

拍子ニ合ハス  
 拍子ニ合ハス

尚年山即位とさまりてケル継體天皇テン  
 と申すなりサラリとされば治る法代の  
 影日の本の名もあひにあり  
 大和の國や玉穗の都にサレ今宮造  
 ありたありサレ萬代の恵も久し  
 富草の恵も久し富草の種も  
 常く秋の空露も時雨も時めま

有言

四

て四方に色をみ初紅塔ハルカ松も千歳の  
 緑にて常磐の秋に廻りあみ幸  
 の車早めんト幸の車早めん  
 いかにあれなる格入都への道教へ  
 て賜へ行物狂とわ物狂も思ふ心の  
 あれべこそ回へおど情なく教へ給りぬ  
 そわツレ月サラリあう人の教へすも都への

後シテ女上 朗カニ  
 一セイヨク  
 拍子三合六六

たじま

二

適ミチしるべこそよあれ山際ヤマノヘへ雁カリガネの  
 渡ワタリりゆ竹雁シテ竹の渡ワタリるとやけに今  
 思イダひおしきたり秋アキにわらも雁カリガネの南ミナミへ  
 渡ワタリる天アマつ空ソラ 空ソラ言コトあら君キミが住スむ  
 都ミヤコとやらんもそなたあれば聲コエと  
 一ヒトづの便タヨリの友トモとわれもたのむの  
 雁カリガネこそ連れて執ツク路ジツの去サるべあれ

シテカシテ  
 そのよぶ名ナはおみ蘇ソ武ブが旅リ雁ガニ  
 章マとつけし南ミナミの都ミヤコ路ジツにわれも  
 ともは連れて行イけ 宿ヤドかりかぬの  
 旅タビ衣ヒ 飛ヒび立つむかりのそろかあ  
 シテサシ上ウヘ 君キミが住スむ秋アキの白シラ山ヤマ知チらぬとも行イき  
 てや見ミましあしびきの大オホ和ニのつづく白シラ  
 雲クモの首ウタの山ヤマのよそはのみにてや

止みあんとあまの雲居いつく御影  
 山日の本なれや大和ある玉穂の都  
 色ぐあり引の近江の湖あれわ  
 みづからよあくも及ぬ慈子深  
 舟のあがれ行く旅をしのぶの  
 摺衣旅をしのぶの摺衣渡も色  
 か黒髪あかざり別路のあ  
 仲色ぐあり引の近江の湖あれわ  
 舟のあがれ行く旅をしのぶの  
 摺衣旅をしのぶの摺衣渡も色  
 か黒髪あかざり別路のあ

○小詠

早上ツヨク  
 拍子合ハズ  
 時しも頃の長月やまたま時雨の色  
 舟子の紅茶の舟幸の道の邊に非  
 形と戒め面々に舟幸の舟さまを  
 心のほれきて鹿の起き即し堪へ  
 かねてあ原通ひゆく秋草の野くれ  
 山くれ露分けて玉穂の宮に暮ま  
 けり玉穂の宮に暮まけり  
 舟子の紅茶の舟幸の道の邊に非  
 形と戒め面々に舟幸の舟さまを

清めけりシテ朗カニあままだよ都にあれぬ  
 鄙人の女キウジンといひシテ狂人キヤウジンといひシテさこそ心の  
 楯の葉の房も乱る露霜の清幸シテ  
 の前サキに進みけり甲 早上和不思議ワミヤシギやあその  
 まま人に夢りたる狂女と見ええてん  
 苦しやとてクシ狂人キヤウジン立ちよう拂ひけり  
 白シテそと退きいへウレサラリあら悲カナしや君の御オン

花篋ハナガタミとおち落されてゆめいかに  
シテカウツテ何と君の御花篋ハナガタミとおち落されたる  
 とやキウラカハあらまの事コトやゆいかに  
 狂女キヤウメ持ちたる花ハナ籠カゴと君の御花篋ハナガタミ  
 とて偶作カウツするゆめも君とは誰か  
 事コトとやすぞシテカウツテ事コト新アララシまの問事トヒコト  
 かなこの君あらそ日の本ヒノホトはまた異コト

君のまゝますべまかツレ上サアリわれららぬ女の  
 狂人キヤクジンあれは知らずと思オモし召ささるムカるムカカ  
 泰カニシテくもこの君の應神オウジン天皇テンノウ五世ゴセ  
 の御孫ミマゴ過スぎり頃迄キマド北國キタクニの倭真ヤマトマコト  
 野ノと申マウす山ヤマ里サトにニ男オトコ大迹オホトギの皇子ミコ  
ツレ上サアリとやツレ上サアリか今イマこの國クニ玉穗タマホの都ミヤに  
シテ朗カニ繼體ツギタマヒの君ミコとやツレ上サアリすツレ上サアリとツレ上サアリかツレ上サアリやツレ上サアリよツレ上サアリければツレ上サアリ

○独吟  
○仕舞

上奉内ウヘノウチ  
拍子ウチ三合サンカウ

かほどはめでたまの君のシテ朗カニ御ミコ花ハナ籠カゴと  
 懼オソもあまぞツレ上サアリいツレ上サアリちツレ上サアリ落オチしツレ上サアリ鈴スズみ  
 人ヒトぞこそシテカウツテわれシテカウツテよりシテカウツテもシテカウツテあシテカウツテはシテカウツテ物モノ狂キヤクよ  
 怨ウラミろウラミわウラミ怨ウラミろウラミわウラミ女メはメまメ世ヨにヨ及ヨぶ  
 といツレ上サアリべツレ上サアリどツレ上サアリ日ヒ月ツキのツキ地チにチ落オチちオチすオチまオチたオチ散チ  
 りツレ上サアリもツレ上サアリせツレ上サアリぬツレ上サアリ花ハナ籠カゴとカゴあカゴらカゴけカゴなカゴやカゴあカゴら  
 かカゴねカゴのカゴまカゴにカゴ落オチしオチ鈴スズをスズとスズ天アメのアメとアメかアメめ

も忽に罰あたり給ひてわ  
かしくある程動して友の物狂といは  
れさせ給ふお人にはいはれさせ給ふ  
あやうに中せはわやうに中せは  
た現ある花筐の言とおぼす  
らんこの君未だその頃は皇子の  
御身おれど朝毎の御勤に花と

手向け禮拜し南無や天照皇太神  
宮天長地久と祿へさせ給ひつ  
手と合させ給ひ御面影の身に  
添ひて忘れ給へまてもたむつか  
しや恋しや陸奥の安積の沼の  
花がつみかつ見し人と哀程のし  
挨拶誰ゆゑぞ乱れ心は君のため

七七



こゝに來てだは隔ある月の都の  
のみにて袖ももうつされず又手に  
も取られずたは後らに水の月と  
望む猿の如くして叫び伏して  
位ま居たり叫び伏して位ま居た  
り。いかに程女宣言にてあるぞ御  
車近う集りていかよも面白う

狂うて舞ひ遊びゆへ。睿然あるべき  
との御事にてあるぞ。急いで狂ひ  
作へ。嬉しやこそは及あまの侍  
影を拜みややすべきいぶや狂はん  
諸共。馬幸に狂ふ雜こそ  
馬前と拂み袂あれ。系なき御  
たへあれどもいかあれは漢玉の李

○サ由独吟

地

ウケテ伸サ

ウケテ伸サ

ウケテ伸サ

ウケテ伸サ

ウケテ伸サ

上巻

上

夫人の御別と歎き給ひ。朝政神  
 まひて夜のおくも徒らふ。た  
 思の候津衣の袂と濡す又孝  
 夫人の紅色の衣の粧衰へて萎る  
 露の床の上ちりりの鏡の影と死  
 ぢりて終に帝に入るえ給はずして  
 去り給ふ用ツ帝深く歎かせ給ひ

○任舞

つ。その御形と甘泉殿の壁に寫  
 しわれも晝圖に立ち添ひて。月  
 言歎き給ひけり。されどもあ  
 あか御思の増れどもものいひ交  
 す事なまきと深く歎き給へば少  
 と申す太子のいけなくま  
 すが父帝に奏し給ふやう明カニ

人の本のこれ社界の壁をわすぬ  
くくの仙女あり一旦人間に生る  
と申せども終に本モトの仙宮セムミヤに歸り  
ぬ泰山タイサン府君フクキョウに申さく孝夫人の  
面影オモエと暫くシヅカに招くべしとて  
丸花マルハナ帳チヤウの中ナカにシテ反魂香ハンコンカウとたま  
弦シヅメの夜更ヨシナけ人静ヒトシヅカり風凄フエしく  
美

中秋チュウシュウなるにそれかと思ふ面影オモエの  
かあカアきかキカにかけろへばあアハほホわワまマの  
思オモ種ムネ葉ハ末ハシに結ムスぶ白露シロツユの羊ヒツにも  
たまらタマらラでデ狂キヤウもモなナくクたタ後ノチにシテ消クえエ  
ぬればヌレバ漂ウラ渺ミウ思オモ徳トク揚ヤウとシテ又マタ孝コウぬ  
まマきキ方カタがガあアらラ悲カミしシまマのノあアまマりリ又マタ  
孝コウ夫人フじんのノ位イみミあアらラ。井イ泉セン殿テンと

立ちきらす。空カクき床トコをうち拂ハラひ。  
古コき衣イ古コき枕マク一ヒト狭ヒトとカたタく

早ハヤ月ツキ確ツキカリトサラリ

宣ノボ旨シにてあるぞ。その花ハナ管ガタミと集

らせ上げゆ。餘シテ朗朗の事コトに胸ムネ

空カラあり。花ハナ管ガタミと。飛トく

あから集ツクらす。帝ミカドのミをミ察サツ後ゴ

あつて。疑ウタガハシもあふ。田タ舎シャにて御ミ手テ

に別ワカれ。御ミ花ハナ管ガタミ同ドウく留トドめ置ツま

給タマひ。御ミ玉タマ章シヤウの恨ウラミと忘ワシれ。狂キヤウ

氣キと止トめよ。本モトの如ごとく。召メし使ツはん

まの宣ノボ旨シあり。けシテ朗朗あり。かたわ

御ミ惠メ直チキあ。馬ウマ代ト又マタ帰カエるし。るも。

思オモへば保タモちし。管ガタミの徳トク。かたわ

とも。に時トキよあふ。若シテ朗朗の管ガタミのミを

小謡

とめて ワキ 恋入まきの手別れし  
 ものせ シテ 明カニ 形見と名づけしめし  
 事 ワキ この時よりそ シテ 婚りける  
 あり 上 拍子ニ合 カたわかくはかり情の末を  
 白露の恵に傳ね花筐の御  
 かがとま キリ上 まさぬ君の清心ぞあり  
 カたま 甲 御遊も既 キリ上 に時過ぎて  
 御遊も既 キリ上 に時過ぎて

御遊も既 キリ上 に時過ぎて  
 幸 カ 奉らん キリ上 供奉の キリ上 人々御車  
 やり キリ上 つげも キリ上 みぢ キリ上 紫散り キリ上 花よ キリ上 亭  
 前 キリ上 を キリ上 拂ひ キリ上 残ら キリ上 む キリ上 や キリ上 袂 キリ上 も キリ上 山 キリ上 風 キリ上 ぞ  
 誘 キリ上 わ キリ上 れ キリ上 ゆ キリ上 く キリ上 や キリ上 玉 キリ上 穂 キリ上 の キリ上 都 キリ上 誘 キリ上 わ キリ上 れ キリ上 ゆ キリ上 く  
 や キリ上 玉 キリ上 穂 キリ上 の キリ上 都 キリ上 盡 キリ上 ま キリ上 せ キリ上 ん キリ上 契 キリ上 ぞ キリ上 あり  
 カ キリ上 た キリ上 ま キリ上 。

Faint, illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

### 富士太鼓

概説

内十四卷ノ五

花園天皇の御時、内裏にて七日の管絃の御會を催されんとて、天王寺の淺間といへる樂人を召されけるが、此時住吉にも富士といへる上手ありて役を望み都に上りけり。帝此由を聞召され、古き歌にも「信濃なる淺間の嶽も燃ゆるといへば富士の煙のかひやなからん」とあれば、淺間の方優るならんと興せさせ給へり。淺間此のことを洩れ聞き富士が己と其技を争はんとせるを憎み之を殺害せり。富士の妻は一子を伴ひて都に上り、斯くと知りていたく歎き悲み、太鼓ゆゑに夫は非業の最後を遂げたれば、太鼓こそ夫の敵も同トとて打ち狂ひて歸りけり。

此曲哀傷ノ意ヲ含ムト云モ優ニ美シク後ハ晴ヤカニ謠フヲ好トス  
小書 現之樂

役別	ワキ官人	装束	附	季	所
	子方富士ノ子女	髮 髮帶 着附箔 唐織着流シ	末	九	京
シテ 富士ノ妻	面深井 髮 髮帶 着附箔 無色腰巻 水衣(洗黄・煎黄ノ類) 縫入腰帶 女笠 無色扇 物着テ鳥兜 舞衣着ル	風折烏帽子 着附厚板 白大口 長絹又ハ單袴衣 腰帶 扇 太刀(間持シ)	附	月	都
				曲柄 菅古順	
				(目番三思) 目番四	
				級 三	

富士太鼓

世阿彌元清作

羊官人用カニ

これハ秋原の院ニ住ハなる下  
 女リノぎても内裏子七日の管絃の  
 出度下ニより天王寺より侍間と  
 申す樂人これの雙又なる太鼓の上手  
 までゆとり上せられ太鼓の役と  
 住りゆ所又住者より富士とヤす

樂人ガクニンこれも劣オトらぬ右ミ鼓ヰの上ノ手テみせて  
ゆが管クワン絃ゲンの役セと望ゾクみ罷マカリり上ノりてゆ。  
この由ユ聞キこゝるこれ富士フジ侍サマ問マタ行イねも  
面白オモシロまき名ナなり。さうあから古コま教ケウふ。  
信シ濃ネなる侍サマ問マタの獄ゲクも燃ヒゆるとらへば  
富士フジの煙ケムリのナかひやあからんしと聞キく  
時はトキなまこそよなるナ富士フジなりとも。

ヨウ年 拍子三合ハズ

あつたれ侍サマ問マタのまきさうすスものごと  
勅チヨク後ゴありしシはよりヨリ重カサねて富士フジと申マウ  
す者モノもあくるスゆユさうサウ程ハジメは侍サマ問マタこの由ユ  
と聞キき憎ウラまき富士フジが振フル舞マヒかなとて  
かの宿シユク所シヨに押オし寄ヨせあへあくる富士フジ  
と討ウツつてゆユ實マコトに不便フビのヒみミ事コトをゆ  
定サめて富士フジがゆかりのノあニ事コトゆユ

と九ツカ八雨カニ

五九ツカ八雨カニ



まゝ。若し尋ね来りては、何れ形せん

と遣はさざやと好しゆ

シテ女ニ上  
用カニ  
子ヲ女ニ上  
次才上  
拍子ニ合

雲の上あはれ遠なる雲の上あはれ

遠なる富士の行方と尋ねん

シテカニ上  
ハルカニ  
拍子ニ合

これハ律の國住者の樂人。富士と

申す人の妻や子までいさても内

裏も七日の管絃のまゝますより。

天玉寺より樂入るされ美ら由と聞き

わらふがまも太鼓の役世は隠れ

けれは望み中さしそのたぬ都へ

よりし夜の間の夢心よかる月の

雨身と知る袖の候か切かかぬ

たる夜もすから寝られぬまゝは

思ひ立つ。寝られぬまゝに思ひ立つ。

○小謡



富士は討たれてゆふ シテカウツテ 行と富士の  
 討たれたるこぶや ワキシツカス あかあかの事。  
 富士の侍向ふ討たれてゆ シテ上ニテカカス 引れがこそ  
 思ひ合せし夢のよと重ねて問はず  
 なかあかの侍向ふ討たれ情なく  
 月 スミヤカニ 月 スミヤカニ も名高き富士のあじ チ 煙とほ  
 なりぬらん チ 今 チ は チ 歎 チ く チ よ チ そ チ の チ か チ ひ チ も

拍子ニ合

月 スミヤカニ

シテ上ニテカカス

拍子ニ合ス

あま シ 跡 シ 残 シ る シ 思 シ ひ シ 子 シ と シ 見 シ る シ から シ よ  
 い シ へ シ 進 シ む シ 涙 シ の シ せ シ き シ あ シ 入 シ ず  
 今 シ の シ 歎 シ き シ ても シ か シ ひ シ あ シ ま シ の シ 事 シ に シ てる  
 ぞ シ これ シ こそ シ 富 シ 士 シ が シ 舞 シ の シ 装 シ 束 シ の シ よ  
 それ シ の シ 歎 シ に シ の シ 形 シ へ シ 又 シ 過 シ ぎ シ た シ る シ 事  
 あ シ ら シ ず シ。 シ それ シ と シ 見 シ て シ 心 シ と シ 慰 シ め シ ぬ シ 入  
 今 シ ま シ だ シ へ シ は シ 行 シ 方 シ も シ 知 シ ら シ ぬ シ 都 シ 人 シ の

ワキ内用カニ

シテ中用カニ

拍子ニ合ス

富士山

四

わらへと田舎の者と思へる。て  
偽り絵みと思ひし。ま真まじらま  
鳥甲月日も変らぬ。将衣の類み  
可もあらばこそ痛りやかの入出  
で絵び一時みづから申すやう。夫  
王寺の衆人のるみそよりたり。御  
身の勅後あきよ。たしそまれば下

上系同用カニ  
カヘテ  
拍子ニ合  
その面影は身よそ入と真のまは  
亡ま跡の忘れ形見ぞよりあま  
かねてよりかくあるべきと思ひあ  
そしと知らぬ類きて出で絵び  
上御身は當社地絵の衆人よて明祚  
よは申す上の行の望のあるべきぞ  
と申しと知らぬ類きて出で絵び  
上系同用カニ  
カヘテ  
拍子ニ合

上系同用カニ

ト

かくあるべきと思ひあはれ秋狢アキノイヌカチ  
と出イダし。強狼ハシラカ候コトにても留トむべ  
きものイコトを今更イマニ又マタ神カミおらぬ身ミを  
恨ウラみかカこコちチ中ナカ々々くクそソ哀アハレあるアル歎イコトくクそ  
哀アハレありアリけるケル物モノ着キ。あアらラ恨ウラめメやヤ夢ユメに  
姫ヒメあアれレ又マタ夫ツマのノ敵カテキのノ佐サぞゾやヤいイざザ討ウチ  
たタうウ 子カカル上あアれレのノ太フタ鼓ツみミてテこコそソゆユ入イ思オモひヒの

餘マりリ又マタ御ミ心ココロ乱マシれレ條ツギあアまマのノ事コトをヲ停ト  
せセんンぞゾわワあアらラ清スまマ。やヤ依ヨ シテ的引ヒキたタて  
のノ人ヒトのノ云クニひヒ言コトやヤあアかカでデ別ワれレんン神カミが  
夫ツマのノ失ウツせセしシ事コトもモ太フタ鼓ツ故コ カカル上たタぶ  
恨ウラめメしシきキはハ太フタ鼓ツありアリ。夫ツマのノ敵カテキと  
いイざザ討ウチたタうウ 子カげケにニ理コトありアリ父チチのノ前マエ  
にニ別ワれレしシ事コトもモ太フタ鼓ツゆユ急イサ。さサあアらラぶ

100-11-10

11

親の敵ぞかし討ちて恨と晴ら  
 すべしシテわらばかためよか夫の敵  
 いざやねらわん諸共に子方男の姿  
 衣る物の具あれや鳥甲シテ恨の敵  
 討ちとさめ子方敵と苦又シテ埋まん  
 として地上討ちするや周の聲立てる秋  
 の風よりすすまよとやシテ引てわうて

○切込雑子

○独吟  
○仕舞

シテ中

やと攻ツキ鼓ツキあウケテらウケテ心ウケテきウケテてウケテこウケテりウケテのウケテおウケテく  
 音ウケテやウケテあウケテあウケテはウケテ腹ウケテたウケテちウケテわウケテけウケテしウケテたウケテる  
 あウケテはウケテもウケテ思ウケテへウケテばウケテ腹ウケテたウケテちウケテわウケテけウケテしウケテたウケテる  
 安ウケテ子ウケテ引ウケテきウケテかウケテ入ウケテてウケテ心ウケテ言ウケテ葉ウケテもウケテ及ウケテばウケテれウケテぬ  
 富士ウケテがウケテ幽ウケテ壺ウケテ来ウケテるウケテとウケテんウケテえウケテてウケテよウケテりウケテあウケテの  
 恨ウケテやウケテもウケテどウケテかウケテしウケテとウケテ大ウケテ鼓ウケテうウケテちウケテたウケテるウケテやウケテ  
 持ウケテちウケテらウケテたウケテるウケテ撥ウケテとウケテバウケテ劔ウケテとウケテ定ウケテめウケテ持ウケテちウケテらウケテたウケテる

シテ中

撥とバ劔と定め。瞋恚の焰の太鼓の  
烽火の天よあがれば雲の上人眞  
の富士嵐に絶えずもまれて裾  
跽の椀四方へむつと散らかと見  
えて。花衣さす手も引く手も。  
伶人の舞あれば太鼓の役は固よ  
り。聞ゆる名の下の空からず。たぐ

ひあやなうか。わ甲 上あ同。わカ入。明カニサリ  
悪心の煩悩の雲晴れて五帝樂  
と打ち終へ。修羅の太鼓の打ちや  
みぬこの君の御命を。大樂と打  
なうよ。甲 地上。サリ。又。子。代。や。萬。代。と。民  
も。榮。え。て。安。穩。よ。乙 中。用。カニ。平。樂。と。打  
なうよ。日も既よ。傾きぬ。日も既よ。

傾ニシラきぬ山ヤマの端ハタを眺ノゾめやりて招マま  
返マす舞マヒの手テの嬉ウレシしや今イマこそ  
思オモひ敵トクの討ウチちたれ討ウチたれて音ネとわ  
出デすらんわれよの晴ハレる胸ムネの煙ケリ富トモ  
士シカ恨ウラミと晴ハレせば涙ナミこそよあかり  
けれキリれキリまでありや人ヒトぞよこれ  
までありや人ヒトぞよ眼メ押ししてさら

ぞと伶シノ人の姿カタ鳥甲トリカサ皆みな脱ヌぎ捨て  
我ワカ心ココロ乱マシれ笠カサ乱マシれ髪カミかがる思オモひ  
忘ワスれと又また立ち返マりる鼓ウタこそ  
憂ウレシまの人の形カタえなりけれとウレシ墨スミ  
きてぞ帰カエりける跡アトえ置オきてぞ  
帰カエりける。

100/100

100





著者權限  
顧慙不許

大正拾年三月十日印刷  
同年三月十五日發行

訂正著作者

廿四世

觀世元滋

京都市上京區二條通麩屋町東北角

發行兼印刷者 檜 常之助

東京市神田區錦町二丁目拾番地

發行所 檜 大瓜

東京市四谷區傳馬町貳丁目

印刷所 江川堂



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '觀世元滋' and other characters.

終